

心はきらめく生きもの

僕の心の中で生きていれば
死んだことにはならない…

と話をしたのは、小学一、二年生の男子であった。平成二年十二月二日金曜日、朝のテレビを見ていたときのことである。

往年の大女優・木暮実千代（平成二年六月十三日亡享年七一歳）の死について、孫息子がこう話していた。肉体は消えても、霊体である心は消えませんかと言い切ったことは、死んでも生きている命の証しを探索する者としては、実に貴重な言葉であった。

すでに、二〇年近い昔の話である。ノートのメモ書きをここに転載したのは、大人から靈魂にかかわる話題が出ると、とかく嫌われがちなものだが、子どもの口から言われるとすんなり受け入れてくれるからである。

七、八歳の子どもが、「僕の心の中で生きていれば死んだことにはならない」と祖母の死について話したということは、「心は生きているんだ。永遠のいのちの中で生きているんだ。それぞれの思いの中で生きているんだ」とはつきり自覚していることを話してくれたのだといえよう。

共時性現象（俗称＝偶然の一致）について深めていくと、その体験を重ねるごとに、この世から「偶然」や「必然」という表現が消え失せていく。あらゆることにおいて、「当然」という一言が適切ではないかと思うようになった。

共時性現象は、あらゆる縁結びの道明かりになっているといえる。縁は、その人の運勢運命の道明かりとなり、刹那の出会いの縁が人生のターニングポイントになることが少なくはないのである。

縁結び（出会い）ということを地上の現実としたとき、いわば外界で起きるその縁結びの一切を担当するのが魂の世界であり、目には見えない地下の世界（内界）なのである。それでいて深く広く、極言するなら宇宙大にもなるものだし、とてつもないエネルギーの充満する意識情報の世界だといえよう。各人の心の中では、昼夜を問わず縁結び

の会議が開かれていると考えてみればわかりやすいかと思う。

亡くなった方々の心ごころと、この世で蓄積してきた自分の心が合体して外界に押し上げようとしている。縁結びのメッセージを出しつづけているのだが、とかく今の自分はそれに気づかない。しかし、内界の心の表現（メッセージ）は、外界の文字・数・色のエネルギーを介して発信しつづけているのである。細大もろさず、些細なご縁の中にもそれなりの意志性のひびきがあると私は考えている。いつてみれば、どのようなご縁にもそれなりの意味を含んでいるということである。

一見当たり前でつまらないと思うことでも、その外界での現れ方にはそれなりの心の内界事情の絡み合いがあつてのことであり、一人一人の心の色合いを持つものである。

いのちの中に記憶された心の総合情報は、文字的・数的・色的なひびきに乗って、一種の触覚センサーの働きとなつて、現実界で生きようとしているのである。いい方を変えれば、その心のセンサー（心の触覚）は、その人の運勢運命を開くカギを握っているといつてもいいのである。

どんな出会いにも、共振共鳴できるその心の同期的接点があるからだとは考えている。出会いの奥深くにはもの申す魂の光がきらめいていて、その出番を待っているよう

なものである。

毎日の暮らしの中で、全く関係ないと思えるそのときそのときの出会いの縁であつても、たとえその発現に歳月を要したとしても、必ずや心の中には触れ合う接点の因子があると私は考えている。「無関係の関係性」といつてもいいと思う。無関係の出会いと思えたときでも、その関係性の心の因子が存在していたのである。

自分の心にはないものは、この世での実現性は限りなくゼロに近いのは当然であり、心にはないものは実現性が薄くなり、心になればその実現性は現実味を帯びてくるという当然のことが起こる。心の舟の舵取りは今の自分の心の向きでしかない。

「無関係の関係性」の出会いの縁は、大小強弱日々発生しているが、九九%の方は気にかけることもないであろう。

平成二年一二月八日土曜日のことであつた。一二月八日は、仏教界では、お釈迦さまが悟りを開かれた日として多くの催しで賑わう日である。

この日数人で羽黒山に参拝しての帰り道、昼近くであつたから、足を延ばして遊佐町吹浦にある「北海」という中華そば屋を目指すことにした。予定になかった思いつきの

行動である。車の燃料切れのためガソリンスタンドで給油することになり、出てきた店員に目を向けた妻が、

「あれ、わたしの色とそっくりだよ」

妻が頭に巻いていたネッカチーフの三色と店員の制服の色が、とても象徴的に合致していたことは誰の目にも明白であった。赤色、白色、紺色であり、さらに店員の左胸のネームプレートには「菅原亮」と書かれている。こちらの苗字も菅原である。こんなことは一見何でもないことであるが、その引き寄せの糸をたぐり、ここに寄らねばならなかった行動を振りかえってみたとき、自宅を素通りしてまで中華そば屋に心引かれて足を延ばしたのはなぜだったのか。

「北海」という店のラーメンの味を知ってはいた。心の記憶（魂）には一点の明かりが灯っていて、その日のコースは微妙なかたちで描かれていたということである。

そば屋を出てから帰りの道で、妻が菓子店に寄りたいと言い出した。立ち寄ったとき時刻は一時二八分になっていた。菓子屋の屋号は文屋、店主は菅原忠之という。今日は二月八日の「一二八」。店到着が一時二八分の「一二八」。店主もこちらもともに菅原の姓である。そして、妻の名は富美子Ⅱフミコ、店の名は文屋Ⅱフミヤというひびきが

強まっている。

この日の行動の流れを一般的な常識でみるなら、羽黒山に出かけて、帰りは家を素通りして吹浦の中華そば屋に足を延ばし、途中スタンドで給油するという、まったく予定外の行動だったわけだが、それは現実の表の世界でのことである。その現実世界で流れている姿を現実化している内なる心の世界では、主人公（妻）の心の内面では、「いのちの予知性」とでもいうか、今日一日の動きができあがっていたことになるのではないだろうか。その道のりには、文字的に、数的に、色的にという三大エネルギーでの縁組みのあることすなわち、出会いのあることを示しているのである。今日の行動の絵図面が妻の心を通してできていたことにはならないのか。そうでないとするなら、それは即興的予知反応なのであるうか。

この世には同姓同名は少なからずある。また、同名となればその数はさらに多くなる。しかし、いざこの足で探すとしたらまず無理というものである。インターネットなどの統計上の資料でアクセスするのではなく、足で探すことの不可能性。それをこの魂の世界では、いとも自然に楽々とそれを可能とさせてくれるのである。「ナポレオンの辞書に不可能はない」というが、それは言葉を操る誇張といえる。その点いのちの世界に

は本当に不可能はない。一人ひとりの全身に充滿する総合意識（靈魂）と、いのちの絶對調和力による出会いの縁結びであれば、何もかも当然に起こり得る可能性の世界であると思う。文字・数・色を介して、魂のひびき（意志性）を明かすことのできる当然の流れを示す道明かりであると考えている。

ところで、この日一日は妻の内界を核とした魂の結び合いであったが、心の世界のサイクルは半月後の一二月二四日月曜日と三〇日曜日の両日にかけてもなお、続いていたのであった。意識の流れは我が身の中で連綿と続いていたのである。

一二月二四日月曜日に、氣仙沼市大島に出かけた所、若いカップルと出会った。二人のうち男性の名は田中晃^{あきら}さん。出会いの場所は龜山山頂であり、対岸の本土には鶴ヶ浦があつて鶴と龜のめでたい懸け橋となる思い出の場所であつた。

一二月八日に給油で出会つた菅原亮^{あきら}さんと、一二月二四日に大島の龜山で出会つた田中晃^{あきら}さんの兩名の間は、なんら関係は見当たらないが、私たちの心の内界には、情報意識としてインプットされている。一度組み込まれた外的情報は、細大漏らさず意識層の記憶ピットの中に蓄積され、魂の一員となつて、心のいのちとなり、息を吹き返すことにもなる。

一度心にインプットされると、その出会いの記憶は無意識層の中で縁結びの出会いのセンサーの一員になる。その情報の善し悪しを問わず自己形成の一員になつてゆくのである。だからこそ心の環境がとても重要になるのである。心の向き方で人生の運勢運命の方向性もおのずと定まつてゆく。自分を見つめることの大切さがわかる。

一度でも出会うこと、ふれ合うこと、一刻一瞬のご縁であつても、五感六感から吸収された意識情報は、一切適切自分の心の中に記録されることになり、その心の情報が心の世界で化学反応を起こして、文字的・数的・色的三大意志エネルギーに同化する。そして、目の前の現実世界に飛び出してくる。共振共鳴の磁気を帯びた意識性となつて出会いの縁を結び出すのである。

どんな心であつてもいのちは、磁気・磁波・磁性体であるから、心は善くも悪くも、きらめく生き物なのである。



上杉家家紋

家紋で示す魂の实在

かねてより妻は、上杉鷹山公に想いを寄せていた。殿の妻、幸姫には殊さらに深い想いを寄せていた。いつの日か、米沢の上杉神社と上杉家廟所を参拝できる日を、心待ちにしていたことを私は知っていた。

ちょうどその頃、山形新聞夕刊一面で、県内の温泉めぐりの記事を連載していて、それを私はスクラップしていた。その中で、特に心を引いた山峡の温泉が心に残り、それも、妻の想いと合流できる米沢市であることから、早速訪れることになった。

平成六年八月三〇日早朝五時一分、自宅を出た車は、一路米沢へと向った。上杉鷹山公經由滑川温泉行きのコースで走ったのである。

妻は、米（稲霊）の意識レベルに在り、私も、米はいのちの光と尊く思い、米の種籾を肌身離すことはない。ともに、米は、心の共鳴磁場として一際敬虔な思いの中にある。

上杉鷹山公は、江戸時代随一の名君ともいわれており、いのちを守る米については、凶作に備え、城下や村々の蔵に、稲籾のままの備蓄を果たし、天明の大飢饉でも、一人の領民をも欠かすことなく救ったと伝えられている。

鷹山公の遺影を残す坐像は、彫刻家、米林勝二、鋳造者は、境幸山が製作に当り完成されている。

“米”を心の共鳴磁場に持つ者にとっては、

米沢の“米の文字”も、

鷹山公の“米”に向けるいのちの愛も、

坐像担当の、米林勝二の“米の文字”も

ともに、いのちの米に向ける熱い魂のひ

びぎで結ばれていると思われる。

さらに、上杉謙信公家訓“二六ヶ條”は、

米の数霊シンボル（八八〇一六〇七）の

“二六”に、共振共鳴し、やはり、“米”と

の共時性としてよいのでは、と、秘かに



上杉家家紋入り座布団

思ってみた。

また、上杉家の家紋は、

〃竹に雀

であることを知り、雀とは、また、米にとつて縁深い波動を感じさせてくれるし……いよいよ、魂の共振を深めたのである。

上杉家を離れ、一路温泉に向けて走った。温泉は、深山幽谷の自然美に抱かれ、約二二〇年前、上杉藩第九代、上杉重定（鷹山公の妻、幸姫の父）の許を得て開湯され、山

峡のいで湯として多くの人々に親しまれてきたといわれる滑川温泉である。
温泉旅館、福田屋に到着し、第一号室に通され、中に入ると、思いは一気に爆発することになった。

鷹山公の魂が、目の前に居られるとしか思えない現象が発現したのである。あまりの驚きで仲居さんに尋ねてみると、

「この部屋（第一号室）だけにこの座布団が敷いてあって、他には、一切使っておりません」という。

座布団には、花が咲いたように、

〃竹に雀

の家紋が織られていたのである。〃竹に雀〃の家紋を持つ上杉鷹山公とご縁いただいたのは、つい先程のことである。

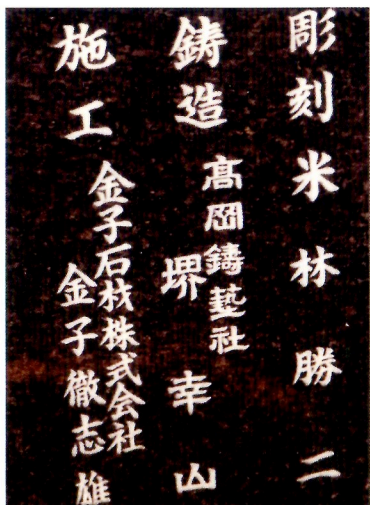
さらに、布団カバーには、

〃No.一六〃

と印されていて、米の数霊シンボル〃一六〃（八八〃一六）と共振し、上杉家〃一六ヶ條〃家訓とも共鳴するではないか。

次々織りなす魂のひびきは、広く深い普遍の世界、いのちが輝く普遍の世界から鳴りひびいてくる。

また、気づいたことの一つに、鷹山公の坐像



上杉鷹山公坐像製作者

製作担当者「堺幸山」の名前にも霊妙なるいざないを感じたのである。

「幸姫の「幸」と、鷹山公の「山」と、殿夫婦の各一字を合わせると、「幸山」

となるではないか。

ここにも、文字を共鳴媒体としての魂のひびきを感じ、胸の高鳴る思いが続いたのである。

三、で開いた天童の姫

五節句の一つ、三月三日は桃の節句や雛祭りといわれ、女の子のすこやかな成長を祈るめでたい日である。

平成三年三月三日のこの日、山形県天童市で奇跡的ともいえる女の子が生まれた。めでたい盃ごとに三三九度というのがあるが、この日の出産のめでたさは大変なものであった。三三九度を越えて三と三が何重にも重なる見事な女の子が誕生したのである。そのことを平成三年三月五日の山形新聞の記事から拾い上げてみる。平成三年三月三日午後三時三三分、天童病院の三号室で体重三、三〇〇グラムの女の子を出産、この子は三人目の子どもで、父親は三月生まれの三三歳…。

ひな祭りに大安吉日も重なったこの日、天の扉が一気に開いたとしか思えない。天童市に誕生した天のわらべ（童）ではないのか。ご両親とご家族は喜びのあまり、この

3月3日午後3時33分 誕生

天童病院 3300の元気な女兒

ひな祭りと天安吉も重 ちは三人目の子供、しかし
なり、文字通りのラッキーも桃の節句を祝うかのよう
13、となった三月三日、に女兒だった。さらに驚く
天童市の市立天童病院(松 さん自身も三月生まれの三
田一郎院長)で「三つくし 十三歳で一家祭りの幸
の赤ちゃん」が誕生、喜び 運となった。
に沸き返っている。 母子ともすこぶる元気

お父さん、3月生まれ33歳

同市貫津の公務員赤塚嘉 取り上げた松田院長は
知・隆子さん夫婦の赤ちゃん、これほどの偶然、が重
んで、同日午後三時三十三 なんとほろろと驚かされ、
分に生まれ、体重も三千三 天のおぼしめし」とびっく
百。五目の予定日だった。三男室でスヤスヤ眠る
が、この日早朝、産気づき 子を前に両親は「三にちな
入院したという。夫婦にと んだ名前を考えます」。

平成 3 (1991) 年 3 月 5 日付、山形新聞

子は特別な子ではないかと思ったりかもしれない。これを私は決して偶然とは考えていない。「天童の街」は、「天道の街」ともひびいてくるし、天意に通じる新生児とさえ思えてくる。出産出生という世界は人が立ち入ることのできない領域である。出生のサポートはできても、生命創造の世界は天意の世界である。誰も手の出せない世界である。

「三」の数字(数霊)がこれほど連なることは、この世に偶然などないことを知らせているようではないか。あらゆる生命の誕生が生命世界の意志性で育てられている一つの証しではないかと考えたとき、三の意志性の開花を祝いたく思う。

いのちの根源は何であるか、と問いつつ、自分なりに考えると、いのちの根源エネルギーは、代謝エネルギーであり、その代謝力は躍動力に点火(転化)されるように思う。代謝力が躍動力を呼び起こして、そのエネルギーがリズムカルに作動するとき、恒久的安

定エネルギーが生ずることになる。いのちは代謝―躍動―安定持続のエネルギー体といえる。その循環の中心をなすのは代謝エネルギーである。代謝力は宇宙絶対調和力だとも考えている。代謝エネルギーこそが量のバランスであり、量のバランスこそが数のエネルギーバランスだと思っている。

私たちが生かされている地球のいのち、宇宙のいのちが、こうして恒久的バランスを維持できることにこそ、数的基本エネルギーが働いているからではないかと私は考えている。宇宙絶対調和力に欠かせないのは先に記した三大エネルギー(代謝・躍動・安定)の存在ではないのか、さらにその中心となるのが代謝力であり、数的(量的)バランスではないのか、この三大エネルギーこそが生命根源力ではないのか…

三大エネルギーと「三」の数には、生命根源に通じる強い響きを感じてならない。天童の街に生まれた新生児は、数的バランスと調和に満ちたいのちの力で溢れている、安定した生命を授けられたいのちといえるのではないか。

この新聞記事を読み、この子の名前を知りたくなって父親に電話で尋ねてみると、絵美と命名されたとのこと。やはり、数の三の響き「美(み)三」で締めてあった。電話をかけたのは平成二〇年一月三日の文化の日、何の意図もなく「三日」のご縁であつ

た。そればかりではない。この日、妻と二人で一〇年前に開拓した鳥海山麓に水汲みに行ったのだが到着したのが三時三三分。作業日誌に記録しようとしたとき、「あれ」と息をのんだ。午後三時三三分は絵美ちゃんの出生時間ではないか。

どうしてこうなるのか、確答を得ることはできない。無関係の関係性が共時性現象の現れ方の一つなのである。どのような縁でも、われわれ生命体のいのちの線は紛れもなくすべてに繋がっている。生命コンピューターにまさるものはありえない。いのちの無線は「意志」なのである。

「これでもか」「これでもか」と、いのちの中で、魂不滅の意志性を強烈に感じた一瞬であった。

酒と菊の花

圧縮された魂はいずれは爆発する。圧縮されればされるほどその反動は増幅する。理性の蓋を破って一気に飛び出すびっくり箱。魂に新旧はなく時空を越えて活性化する。抑えても抑えても心の壁を破って外へ出る。心が麻痺してコントロール不能となれば、理性不全でブレーキ不全の危険信号だ。在りし日の自分の姿を目の前にしたような気がした。

彼はある日、一人の同僚を連れてやってきた。平成三年四月二〇日の夕方のことだった、左手に二本のビール、右手にはツマミを持っていた。

見たところ貴公子風の彼は、かなりの酒が入っているらしく、目はとろめき加減で、一瞬私は身構えた。断酒してからというもの、この家には酒席の外来者は誰ひとりとして寄せつけていなかったからだ。

私には、酒は喜びの域を逸脱しがちであった。酒を飲めば常とはいわずとも身を滅ぼす酒乱となつて地獄酒となつたあの日、あの時が、恨めしくも心のスクリーンに映しだされてくるのである。

私が断酒してすでに六年が過ぎようとしていたこの日、彼は、断酒を誓いながらミリほどの隙間から吹きつけるアルコールの風に心がゆらぎ、昼の酒に手を出したのであった。

それでも彼は、ここ一四日間は禁酒を守り通していた。私はその辛さがわかるだけに「よくやった」と思うが、一度口に入れた酒はすべてを麻痺させる魔物に変身してしまうのである。理性のブレーキが効かなくなり、それまでの努力も苦勞も、ちよつとした気のゆるみで、「百日の説法屁一つ」の喩えどおり、無駄になってしまうのである。

彼はその日、友人から結婚式の招待を受けていたのだが、どんな言い訳をしたのか欠席することになっていた。自分自身を一番知っている彼は、酒席を避けることが唯一の断酒への道だと思っていたにちがいない。

私が彼を知ってからまだ半月を過ぎたばかりだった。妻と二人で商品販売をやっていたから、その特約店の拡大を進めていたときで、そこに紹介されたのが彼の母親であった。話は商売の話から身の上話に及び、母親は息子の酒癖と身の処し方で長いこと悩み疲れていたというのである。そこには、息子の酒乱に苦しむ母親の耐え難い心の苦節があった。その苦悩を心底から受け止めたのは私の妻であった。夫の私にかけた酒乱との歳月がいかほどであるかを知る苛酷波乱の日々を越えてきたからこそ、生々しく受け止めることができたのであろう。

商売の話もそこに、酒乱の息子をどうしたらよいか、息子の断酒更正に心血を注ぐ、話はその一点になつた。

そこで思いついたのは、彼を連れだって、一度私が体験したことのある内観法という心の修行に出てみることであった。平成三年四月七日、その日がやってきた。

三重県にある専光坊というお寺での七日間の行は、自分を深く見つめ直すことの連続であった。

早朝から夜遅くまで、本堂での説法と読経、三度の食事における行儀作法などから、メインはお堂の外で行う一〇時間にも及ぶ座禅三昧の中で、お坊さんの指示で、年代を区切りながら、記憶の限りを思い起こしていく。一定の時間が来るとお坊さんから「何を思い出せましたか」と問われる。そして、次のステップ。年代を区切って「何歳まで

を調べてください」と、指示を出される。

何も敷かれていない板場に素足のままで座し、ひたすら自分調べに没頭し、自分の過去を洗いざらい調べることで、自分の内面をより深く反省することができる。この専光坊は、世界各国からの外人修行者も見えられるほど、人格更正の妙を得た独特の行法を成す希有なるお寺である。

彼の七日間は辛かったと思う。時々トイレに立ってはこっそり喫煙をしていたようだ。当然にして七日間、酒、タバコは一切禁止。暗い早朝から夜九時までの自分調べは耐え難いものであったと思われるが、どうにか終了することができた。

その日の帰りのマイカーの中も、修行の延長線上にあるので、酒、タバコは禁止。だが車中は二人きりであり、彼はヤクザな世界に身を置いてきた身分。豹変して私を恫喝どっかっしてでも、酒を買って飲みたいと思ったかもしれない。

私にしてみれば、全くの初対面の若者ではあるが、酒害に犯されたということでは、同類の魂の持ち主でもある。うれしいことに、帰宅するまでの約八〇〇キロの道中を、気分を損ねずに無事戻ることができた。

それからこの日までの一四日間を禁酒で通してくれたのだが、前にも記したように、その日は友人の結婚式である。彼は招待を受けていたが、理由を付けて欠席をすることにして酒席を避けていた。この壁を越せばよかったのだから、酒席を避けたことで欲求不満との闘いが始まる。

欲望をすらりと流すか無視できるなら、断酒は成功というものだが、それができないステップの中で、彼は魂の押し上げに負けてしまい、昼の酒に手を出したのであった。情報時代の現代は、いたるところにアルコールの誘惑が嫌というほどに取り巻いている。アルコールの風は少しの心の隙間から吹き込んできて誘いをかける。

今は身を引いたが、ヤクザな世界に埋没していた当時は、大麻にも手を出し、司法の世話を受けて高い塀の中で半年ほど過ごしたとも彼の口から聞いている。

心霊世界の魂には新しい古いはない。時間、空間のない世界で、私たち一人一人の心を支配している。心霊世界の魂は、響きを上げてその出番を待っている活火山のマグマといってもいいかもしれない。

誰であれ、心の中では、今に生きようとしている魂のマグマダマリが触覚を延ばしてうごめいているのである。

このような新旧混沌とした魂のエネルギーが、プラス因子に働くのであれば万事がう

「縁」には、いのちの調和力が働いていると私は理解しているし、出会いの「縁」によって人生ががらり一転した話は少なくない。「縁」にはきつと何かを論ずエネルギーが働いている。

「菊の花」の意志的響きは魂の切なる思いの表象ととらえてもよいだろう。彼の肌身に染み込んだ菊の花の入れ墨は、彼の魂深くに訴えたのであろう。あるいは、これまでに浮き出てこなかった魂の意志表現が菊の花で具体化したのかもしれない。そして、お茶碗の菊の花と合わせ見た彼の魂は、奥深くで、何かが大きく崩れてゆく思いだったのであらうか。

「それ、菊の花の茶碗ですぞ、あなたの入れ墨とそっくりだ、菊の花と菊の花が共振共鳴している姿ですぞ、どうです！」

と詰め寄った。呆気にとられた彼は酔いが醒めたと思われるほどの驚きの声を発していた。

に上半身を裸にしたのである。彼は長身で肩幅も広く、肌はピンと張り詰めていた。なかなかの彫り物である。それは「菊の花」の文様で彩りされていた。そのとき、妻が先ほどのお茶碗を右手で持ち上げて、



刺青と茶碗の菊の花

まくいくのだが、ひとたびマイナス因子に働くことになれば、表層の意志の力を打ち破って外に出てくることにもなり、すなわち、理性という心のブレーキを打ち砕いてしまうのだ。小さな穴が空いて川の堤防を決壊する災害のように、常に、アルコールの風は心の隙間に容赦なく吹きつけている。

友人の結婚式欠席という、出席したいがそれを抑えた鬱積が、彼を昼の酒に追いこむことになったのであった。彼は、二本のビールを私と一緒に飲もうとしたのだが、私は、「あなたは飲んで俺は飲まない」と断った。

このとき、妻がお茶を用意して運んできた。彼にはお茶など目に入らない。ビールの独り飲みを続け、いよいよ饒舌に拍車がかかってきた。彼は、決してちらつかせることのなかった上半身の入れ墨の肌をまくり始めた。こちらは何の心の動きもなくじいっと見ていると、つい